



【アフガニスタン】



レポーター

紀子 デスレフツ さん
現在はオーストラリア在住

はな
アフガニスタンを離れて

SIGNALの前身、KIANニュースの「海外生活レポート」で4年に渡り、戦禍の絶えないアフガニスタンからレポートを届けてくださった紀子デスレフツさんが、2009年5月に、無事、オーストラリアに帰国されました。

アフガニスタンの眼科医を研修して欲しいという要請に応え、彼の地に赴任したご主人に、紀子さんも同行。4年間の生き活きとしたレポートの最後のまとめとして、帰国後の感想をここに紹介します。

また、KIANに掲載していたレポートの原文は英語で書かれていたため、親友の泉晶子さんが、毎回、翻訳に協力して下さっていました。ここに感謝申し上げます。

(交流協会 編集担当:本庄由美)

ピス、町を歩いたり車を運転する自由、家族や古い友人たちと過ごす時間をどれほど待ち焦がれていたことか。しかし、極端な寒暖、たびたび直面させられた身の危険にもかかわらず、私たちは、職場や生活をともにしたアフガニスタンの人々を愛してやみません。

戦争で引き裂かれた国にあって、数



▲Nanwai 病院に向かう途中

え切れないほどの苦悶や傷みを抱えながらも、失われることの無かった彼らの快活さや、温かなもてなしを私たちは決して忘れないでしょう。

この国の言葉を習えたこと、自国の平和を願いつつ、日々多くの困難に直面しながらもなお、周りの人を励まし続ける人々と共に生活できたことは、特別なことだったと思います。

私たちの友達の何人かは、爆弾や射撃、地雷によって手足を無くし、ほとんどの人がその日暮らしをしています。

なかには「とても裕福」な人もいましたが、非常に稀でした。それに引き換え、戦争で家族がひとりも死んでいないという人に会うことは、まずありませんでした。

アフガニスタンの人々は心から恐怖や貧困のない生活を切望しています。

また、彼らはことわざが大好きです。その中で私の大好きなことわざのひとつに、"A drop, a drop and a river it will be."というのがあります。

他人を助けるために私達ができることは、小さな取るに足りないことかもしれません。でも、その「小さな一滴」が積み積み積もってやがては川となるように、私たちの祈りはやがてアフガニスタンに恒久の平和をもたらすことなのでしょう。

たとえそれが、小さな小さな手掛かりだったとしても…

(英語原文・写真提供:紀子デスレフツ)

(翻訳:本庄由美)



▲Shaddai ヤギの群れ



▲Marjed

2005年3月に私達はカブルに到着しました。あれから4年以上が経っているなんて、信じられない思いです。

WHOの2020年ビジョンの声明から、治療可能な失明を減らすことを目的とした眼科医の研修を夫が頼まれ、私たちはアフガニスタンの地に赴きました。

その研修もようやく終わりを迎え、シドニーに程近い我が家に帰る時がきました。

病院や私が英語を教えていた所でさよならパーティーを開いていただきましたが、心が引き裂かれる思いでした。

もちろん、24時間電気のある生活、日常生活を快適に暮らすための諸々の基盤、無尽蔵にある物やサー